

## 2. 2003年夏の北半球ダブルジェット

前田 修平\*・佐藤

均\*・小林 ちあき\*

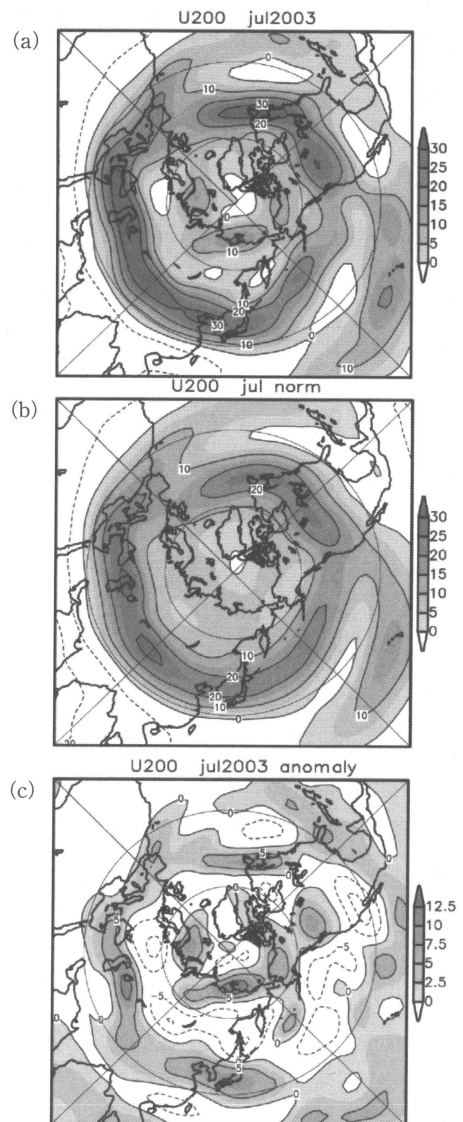
### 1. はじめに

2003年夏の北半球帯状平均場では、平年に比べ寒帯前線ジェットが明瞭で亜熱帯ジェットも強かった。このいわゆるダブルジェットの状態は、特に7月の東半球側で明瞭で、1979年以後では最も顕著であった。また、寒帯前線ジェットの南側の北緯60～70度付近ではロシア西部と東シベリアで気圧の尾根が持続した。このうち、東シベリアの気圧の尾根は、日本に冷夏をもたらしたオホーツク海高気圧の持続と密接に関係している。ここでは、7月に東半球で卓越したこのダブルジェットと、関連する擾乱の振る舞いについて述べる。使用する解析データは米国環境予測センター/米国大気科学研究所の再解析データ (Kalnay *et al.*, 1996) である。

### 2. ダブルジェット

第1図は、2003年7月の200 hPa 東西風である。平年(ここでは1979～2003年の25年平均値)に比べ、北緯40度付近を中心に亜熱帯ジェットが、北緯70度付近を中心に寒帯前線ジェットがそれぞれ東半球側で強く、また、これらのジェットに挟まれた緯度帯で北緯50度を中心に弱風域となっている。東半球で平均した200 hPa 東西風の緯度分布(第2図)を見ると、ダブルジェットが明瞭である。第3図は東半球で平均した200 hPa 東西風の時間緯度断面図である。このダブルジェットの状態は6月終わりごろから8月半ばごろまで持続したことがわかる。

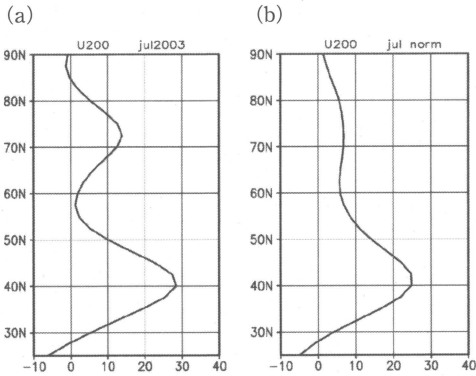
第2図で示した東西風の緯度分布を過去の7月と比較するために、東半球で平均した200 hPa 東西風を主成分分析した。主成分分析の対象とした期間は、1979～2003年の25年間で、北緯25～87.5度の2.5度毎のデータに面積重みをつけた共分散行列を用いた。第4



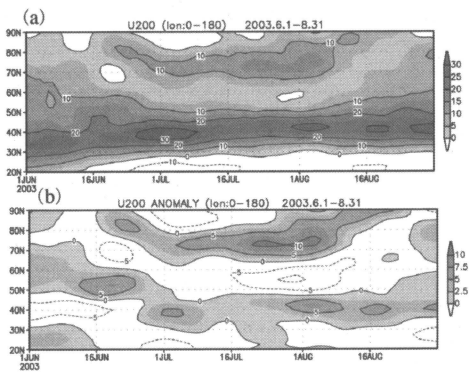
第1図 200 hPa 東西風。(a) 2003年7月、(b) 平年値(1979～2003年)、(c) 2003年7月平年偏差。等値線間隔は、(a)と(b)が10 m/sで、(c)が5 m/s。

\* 気象庁気候情報課。

© 2005 日本気象学会



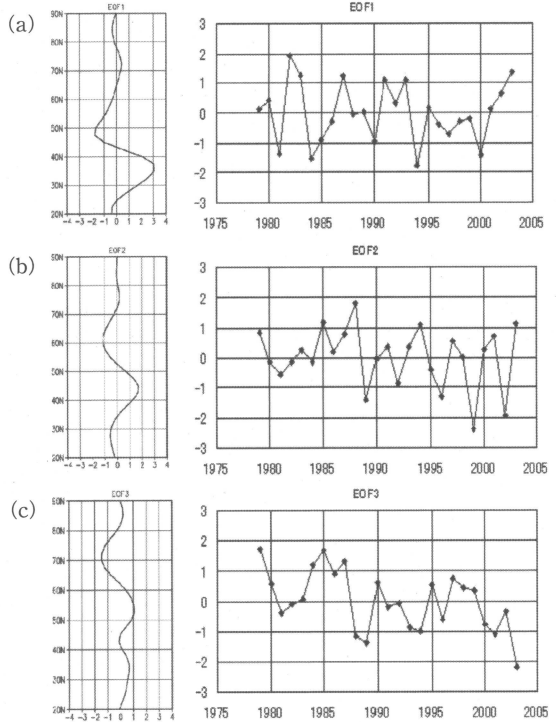
第2図 東半球で帯状平均した200 hPa 東西風 (北緯20~90度). (a)2003年7月, (b) 平年値. 横軸の単位は m/s.



第3図 東半球で帯状平均した200 hPa 東西風の時間緯度断面図 (北緯20~90度). (a) 2003年6月1日~8月31日, 7日移動平均. (b) (a)と同じ, 但し平年偏差. 等値線間隔は(a)が10 m/s で(b)が5 m/s.

図に第3主成分までの因子負荷量と規格化した主成分スコアを示す。2003年は各主成分ともに絶対値が大きく、25年間で第1と第2主成分は正の上から2番目、第3主成分は負で最も小さい。因子負荷量の分布から、第1主成分は主に亜熱帯ジェットの変動、第3主成分は主に寒帯前線ジェットの変動を表していると考えられるが、そのどちらの絶対値も大きいことから、2003年の7月の東半球の東西風分布は特異であったということがわかる。実際、各年の図を見ても、この25年間で2003年ほどダブルジェットが明瞭な年はない(図略)。

次に、擾乱の水平構造について見る。第5図は、2003年7月の500 hPa 高度と平年偏差である。寒帯前線

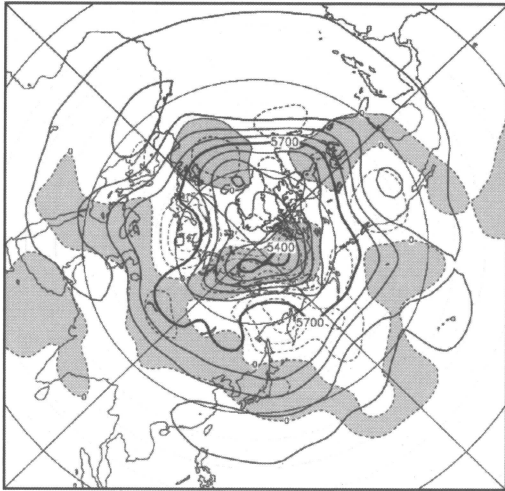


第4図 東半球で平均した7月の200 hPa 東西風の主成分分析. 左: 因子負荷量, 右: 規格化した主成分スコア (1979~2003年). それぞれ, (a)第1主成分 (寄与率48%), (b)第2主成分 (同18%), (c)第3主成分 (同16%).

ジェットの中心から南側の北緯60~70度ではヨーロッパ北部と東シベリアに気圧の尾根が、西シベリアには気圧の谷が見られる。第6図は、これらの擾乱を含む北緯60~75度で平均した500 hPa 高度の平年偏差の経度時間断面図である。7月の中旬初めに東経30度付近に見られる正偏差、80度付近に見られる負偏差、および130度付近に見られる正偏差が東進し、8月上旬にはそれぞれ東経60度、100度、160度付近に達した。この偏差パターンは、30日で約30度と非常にゆっくりと東進する準定常擾乱であることがわかる。この擾乱のうち、東シベリアの気圧の尾根は、日本に冷夏をもたらしたオホーツク海高気圧の持続と密接に関係している。

### 3. 寒帯前線ジェットと擾乱との関係

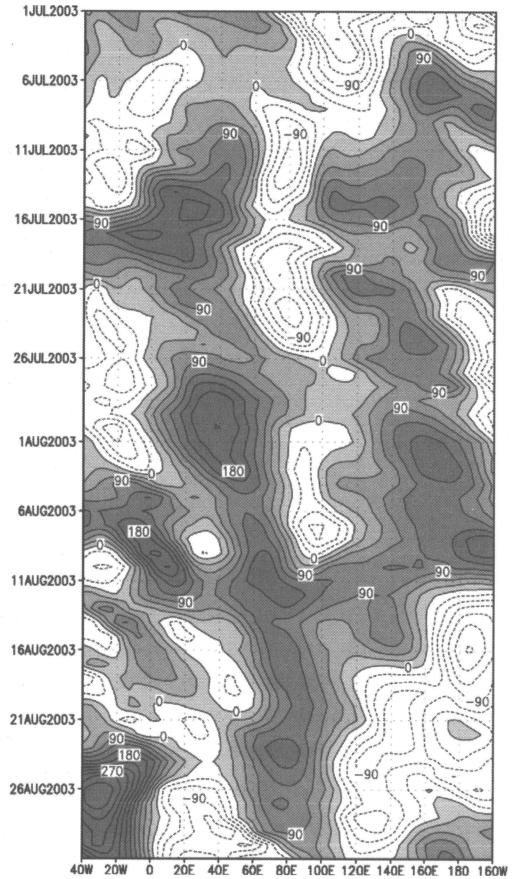
ジェットの構造は、ロスビー波の伝播方向や順圧・傾圧不安定による擾乱の成長など、ジェットと関連し



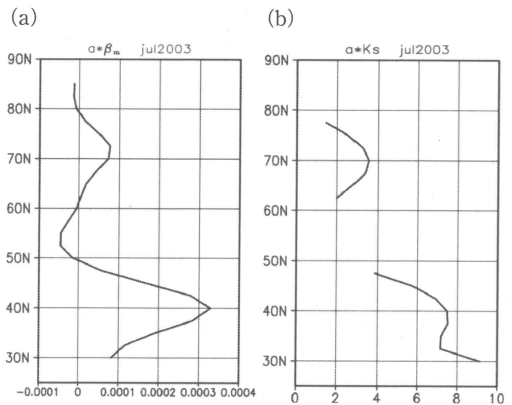
第5図 2003年7月の500 hPa 高度と平年偏差. 実線が高度で等値線間隔は60 m, 破線が平年偏差で等値線間隔は30 m. 負偏差に影.

て活動する擾乱の振る舞いに大きな影響を与える. たとえば, 東西方向に一樣な東西風  $U$  を基本場として考えると, 基本場の絶対渦度の南北方向の微分 ( $\beta - U_{yy}$ ) が符号を変えることが順圧不安定の必要条件であるし, 定常順圧ロスビー波の全波数  $Ks$  は  $\{(\beta - U_{yy}) / U\}^{1/2}$  で与えられる. ここで,  $\beta$  はコリオリパラメータの南北方向の微分,  $U_{yy}$  は  $U$  の南北方向の2階微分である.  $Ks$  はロスビー波の屈折率にも対応し,  $Ks$  の大きい方向にロスビー波は屈折する. また,  $Ks$  の極大域はロスビー波の導波管となる. これらの議論は Hoskins and Karoly (1981) に詳しい. 第7図には, 2003年7月について東半球で平均した200 hPa の  $U$  から計算した  $(\beta - U_{yy})$  と  $Ks$  を示す. 東半球で平均した  $U$  を基本場と考えて, その基本場の性質を調べようということである. 線が欠けている北緯50度から60度にかけては,  $U$  が正で  $(\beta - U_{yy})$  が負の領域, つまりロスビー波が波として存在できない外部波領域である.  $(\beta - U_{yy})$  が符号を変えるので, 順圧不安定の必要条件を満たしている. また, 寒帯前線ジェットの中心の南側の北緯70度付近で  $Ks$  が極大となり, 寒帯前線ジェットがロスビー波の導波管となっている.  $U$  の平年値で  $Ks$  を計算すると, 導波管は見られるが寒帯前線ジェット南側の外部波領域は存在しない. 過去25年間で2003年のように広い緯度帯で外部波領域が見られるのは, 1988年と1993年のみである (図略).

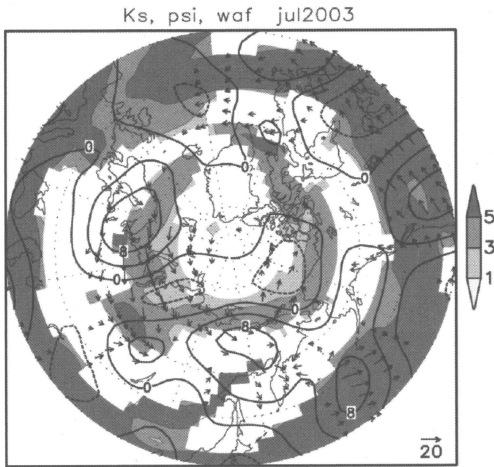
この特徴的なジェットの構造と, 第2項で示した擾



第6図 北緯60~75度で平均した500 hPa 高度平年偏差の経度時間断面図. 2003年7月1日~8月31日の日別値. 西経40~0~西経160度. 等値線間隔は30 m で正に影.

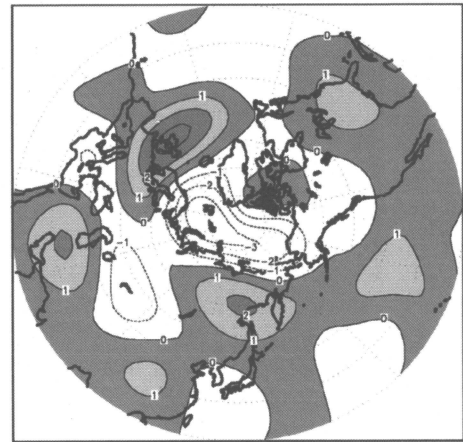


第7図 (a)絶対渦度の南北傾度 ( $m^{-1}s^{-1}$ ) と (b) 定常ロスビー波の全波数  $a \times Ks$ .  $a$  は地球の半径. 2003年7月の東半球平均200 hPa 東西風より計算.



第8図 2003年7月の300 hPa 流線関数偏差 (等値線), 波活動度フラックスの水平成分 (矢印),  $K_s$  (陰). 流線関数偏差の等値線間隔は  $4 \times 10^6 \text{m}^2/\text{s}$ . 波活動度フラックスのスケージングは図右下のとおりで単位は  $\text{m}^2/\text{s}^2$ .

EIGEN MODE N=2 PR=67.4day GR=13.6day



第9図 成長率が2番目に大きい順圧不安定モード. 無次元化した流線関数. 正に影. この順圧不安定モードは13.6日でe倍となる. 周期は67.4日で, ある位相を表示.

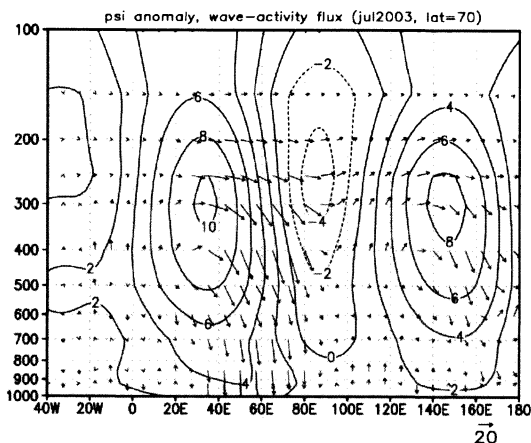
乱はどのような関係があるのだろうか? そこで, 第2項で行った主成分分析をもとに東半球での東西風の分布が2003年7月に近い12年間を選び出し(1980, 82, 83, 88, 89, 91, 92, 93, 95, 2001, 02, 03年), その12年平均値を基本場とし, それからの偏差を擾乱と考え両者の対応関係を調べた. なお, 以後の議論では, 擾乱の振幅が最も大きい300 hPaを対象とし, 基本場は東西方向の構造を持つこととする. 第8図は, 東西方向に構造を持つように拡張した基本場の  $K_s$  (Hoskins and Ambrizzi, 1993), 擾乱の流線関数, および波活動度フラックス (Takaya and Nakamura, 2001) の水平成分を示す. ユーラシア大陸上の高緯度に着目すると, 前述したとおりヨーロッパ北部, 西シベリア, 東シベリアに波列状で振幅の大きな擾乱がある. 波活動度フラックスは, 擾乱の振幅が大きいロシア北西部で湧き出して  $K_s$  の大きな緯度に沿って東向きに伝播し, 東シベリアで沈みこんでいる. この湧き出しは基本場から擾乱への順圧エネルギー変換量 (Tsuyuki and Kurihara, 1989) の大きな領域と, 沈みこみは擾乱から基本場への順圧エネルギー変換量の大きな領域 (図略) と対応している.

第7図で示したように東西流は順圧不安定の必要条件を満たしているし, 第8図で示したように基本場からの順圧的エネルギー変換の過程が擾乱の発達に関わっている. これらのことから, 観測された波列状の

擾乱が基本場からの順圧エネルギー変換で発達する順圧不安定モードと関連していることが考えられる. そこで, この基本場の周りに線形化した非散逸順圧渦度方程式の固有モード (Tsuyuki and Kurihara, 1989) を計算した. その結果, 成長率の2番目に大きな順圧不安定モードとして, 周期が67.4日と長くユーラシア大陸上の寒帯前帯ジェット近傍で大きな振幅を持つモードが得られた. このモードはユーラシア大陸上ではゆっくり東に動き, 第9図に示すある位相では第4図や第8図で示した擾乱と水平構造がよく似ている. 固有モードは基本場の選び方に敏感なので, この結果をもって観測された擾乱が順圧不安定モードであるとは結論できないが, 観測された擾乱の発達と維持に基本場からの順圧エネルギー変換が重要な過程となっていることは間違いなさであろう. なお, この固有モードは周期が長いので, 定常強制に対する応答として卓越しやすい特異モードとも対応していると考えられる (たとえば, Maeda *et al.*, 2000).

第10図は, 北緯70度における擾乱の流線関数と波活動度フラックスの経度高度断面図である. 東経30度付近, 対流圏上部の300 hPa付近で波活動度フラックスが湧き出し, 東向きに伝播しつつ, 下向きにも伝播している様子がわかる. 波活動度フラックスが下向きということは, おおまかにいえばこの擾乱が南向きに熱輸送を行っているということである. このことは, 基本場の南北の温度傾度の維持に, すなわち寒帯前線





第10図 2003年7月の北緯70度における流線関数偏差(実線)と波活動度の東西・鉛直成分(矢印)の経度高度断面図。流線関数偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、波活動度フラックスのスケーリングは図右下のとおりで単位は東西方向が $\text{m}^2/\text{s}^2$ 、鉛直方向が $\text{Pam}/\text{s}^2$ 。但し、鉛直方向は100倍してある。

ジェット維持にこの波列状の擾乱が寄与している可能性を示している。

#### 4. まとめと議論

2003年夏の北半球帯状平均場では、平年に比べ寒帯前線ジェットが明瞭で亜熱帯ジェットも強かった。このダブルジェットの状態は、特に7月の東半球側で明瞭で、1979年以後では最も顕著であった。また、ユーラシア大陸上の寒帯前線ジェットの南側では、波列状の循環パターンが卓越し、ゆっくりと東進した。この擾乱のうち、東シベリアの気圧の尾根は、日本に冷夏をもたらしたオホーツク海高気圧の持続と密接に関係している。この擾乱の発達には、基本場(気候平均場)からの順圧エネルギー変換が一定の役割を果たしている。ダブルジェットの持続メカニズムはよくわからない。但し、寒帯前線ジェット南側の擾乱が、寒帯前線ジェットの持続に関係している可能性がある。

第4図で示した200 hPa東西風の第3主成分スコアが負の年は、寒帯前線ジェットが強く、その南の緯度帯の東西風が弱い年に対応する。このスコアの時系列図を見ると、負のトレンドが明瞭である。すなわち、長期的にはダブルジェットになりやすくなって

いることを示している。現時点では、このトレンドが何によってもたらされているのかはわからないが、近年のシベリアの高温化と対応していることを考慮すると、地球温暖化と関連している可能性もあり興味深い。地球温暖化時に現われやすい空間パターンとの関係など、今後、詳しく調べたい。

2003年7月は、熱帯の対流活動がインド洋の中部～西部で活発でアジアモンスーン域では不活発であった。すなわち、平年に比べ対流活動の活発域が南西にシフトしており、これに対応してハドレー循環も南にシフトしていた(図略)。ハドレー循環の変動に伴う運動量輸送の変動は、亜熱帯ジェットの変動に大きな影響を及ぼすとともに、寒帯前線ジェットの変動に影響を与える可能性もある(Lee and Kim, 2003)。熱帯の対流活動とダブルジェットの持続との関係についても調べたい。

#### 参考文献

- Hoskins, B. J. and T. Ambrizzi, 1993: Rossby wave propagation on a realistic longitudinally varying flow, *J. Atmos. Sci.*, **50**, 1661-1671.
- Hoskins, B. J. and D. J. Karoly, 1981: The steady linear response of a spherical atmosphere to thermal and orographic forcing, *J. Atmos. Sci.*, **38**, 1179-1196.
- Kalnay, E. and Coauthors, 1996: The NCEP/NCAR 40-Year Reanalysis Project, *Bull. Amer. Meteor. Soc.*, **77**, 437-471.
- Lee, S. and H.-K. Kim, 2003: The dynamical relationship between subtropical and eddy-driven jets, *J. Atmos. Sci.*, **60**, 1490-1503.
- Maeda, S., C. Kobayashi, K. Takano and T. Tsuyuki, 2000: Relationship between singular modes of blocking flow and high-frequency eddies, *J. Met. Soc. Japan*, **78**, 631-646.
- Tsuyuki, T. and K. Kurihara, 1989: Impact of convective activity in the western tropical Pacific on the East Asian summer circulation, *J. Met. Soc. Japan*, **67**, 231-247.
- Takaya, K. and H. Nakamura, 2001: A formation of a phase-independent wave-activity flux for stationary and migratory quasigeostrophic eddies on a zonally-varying basic flow, *J. Atmos. Sci.*, **58**, 608-627.